

リハビリテーション医療に携わる者は医療の実践や障害者への対応に十分な興味を持ち努力を続けてきたが、医療における経済学的仕組み、経済効果、医療の費用や効果などに関しては、必ずしも熟知しているとは言えない。近年、回復期リハビリテーション病棟制度の新設、平成 14 年の診療報酬点数の改正などがあり、リハビリテーション医療の費用や効果に無関心ではいられない状況となってきた。社会・経済状況や医療環境は目まぐるしく変化しており、リハビリテーション医療に携わる者もこれらを十分理解して新たな展開を検討する必要がある。そこでリハビリテーション医療の費用や効果に関して、専門の先生方に分かりやすく解説していただくことにした。

■医療経済学の基礎知識

「リハビリテーション医療の費用と効果」の特集の総論として、経済学と医療経済学、社会保険、医療の効率と臨床経済学に関して解説していただいた。臨床経済学における費用の概念は、日常的な費用だけではなく、時間やストレスなど、ある目的を達成するために犠牲にしなければならない全てが含まれており、通常、医療サービス提供に必要な直接費用と患者や家族が負担する間接費用とに区別される。結果の概念としては、効果、効用、便益に分けられる。(高山一夫氏, 507 頁)

■医療の経済評価

主な経済評価法に、費用最小化分析、費用便益分析、費用効果分析、費用効用分析がある。費用最小化分析は、選択肢の間でアウトカムにほとんど差がない場合に、費用だけを比較検討する方法である。費用便益分析は、費用ばかりではなく便益も含めて金額で表示し、期待される効果や疾患が異なっても比較が可能である。費用効果分析は、救命人数や能力障害の程度など、自然で臨床上も意味がある単位で評価する方法であり、期待される効果や疾患が同じ場合にのみ用いられる。費用効用分析は、アウトカムを健康生存年数や質調整生存年数で表し、期待される効果や疾病が異なっても比較できる方法である。(近藤克則氏, 515 頁)

■医療現場からの報告

上記の基本的情報を基に、急性期型一般病院の一例として聖マリア病院(井手 睦氏, 521 頁)、大学病院リハビリテーション病棟の一例として埼玉医科大学(間嶋 満氏, 525 頁)、脳卒中専門病院の一例としてボバース記念病院(畠中めぐみ氏ら, 529 頁)、回復期リハビリテーション病棟の一例として小倉リハビリテーション病院(浜村明徳氏ら, 535 頁)を取り上げ、それぞれの病院のなかでリハビリテーション医療を実践されているリハビリテーション専門医に、その病院のリハビリテーション医療の特色や費用・効果などに関して報告していただくことにした。それぞれリハビリテーション専門医が病院の特色を出して工夫をしており、大変興味ある内容である。